祭 REDISCOVERY

尾鷲ヤーヤ祭り〈尾鷲神社（三重県）〉

尾鷲ヤーヤ祭りは、毎年2月1日から5日までの5日間行われる尾鷲神社の正月の祭礼で、東紀州の奇祭といわれています。 古くからの地域集落ごとに編成される20町の中から、毎年3つの祷務町(とうむちょう)、一番、二番、三番祷が選ばれ輪番で祭りを司っていきます。

各町の若者衆が、「チョウサじゃ」のかけ声とともに喧嘩のような激しい揉み合いを当座の町に仕掛け練り合います。また神事や子供が参加する華やかな大名行列や道中踊りなども行われます。

ヤーヤの名称語源は明らかではありませんが、「やあやあ我こそは…」という武士の立会いの名乗りの戦闘用語に由来すると言われています。練りのときに使われている掛け声「チョウサ」の意味には二つの説があり、一つは無事に年を越したという超歳。二つ目は丁歳、やっと15歳になり一人前の若者衆としてヤーヤ祭りに出られる資格を得て、その喜びを表現したものであると言われています。

祷務町では、祭礼の一ヶ月前の1月10日頃に「巻藁結神事」が行われ、祷人の家の床の間に120把束ねた巻き藁が飾られ、神主と弓射が二本ずつ巻き藁の的に矢を放ちます。これで神社から祷人の家に神(スサノオノミコト)が降りたことになります。以前はこの日から祭礼終了まで注連縄が張られ、巻き藁の安置された精進部屋に精進人(しょーど)である、祷人・弓射・汐撫の三人の役員が泊まり込み、別火の生活に入ります。炊事は汐撫の老人が担当し、女子はこの部屋に入ることはできませんでした。精進人は毎朝夕、尾鷲港の前の浜で海へ飛び込んで垢離をかき、この朝夕の送迎には各町の高張提灯を先頭に町頭や若者たちが従いました。この精進人こそが神に仕える祭りの主役です。

その後、2月1日に尾鷲神社において神のおでましを願う「扉開きの神事」が行われ、夕刻には300人余りが提灯の灯りと供に市内を約2時間かけて歩き、全町に祭りが行われることを告げて回る「在回り」が行われます。2月2日～4日は3つの祷務町に各々振り分けられた残りの17町が手伝い町として集まり「練り」というぶつかり合いが行われ、ヤーヤー祭りが始まります。上半身シャツ姿、下半身体操ズボンとなり、各町の若者衆は小頭の振る提灯の合図に従って一糸乱れない押し合いを仕掛けます。さらにその日の祷務町が大結集し「大練り」が始まります。「チョウサじゃ！チョウサじゃ！」の掛け声と共に、勇壮にぶつかり合うその激しさは「喧嘩の裸祭り」と呼ばれる程です。600人程で行われる大練りは最高潮の熱気で溢れかえります。

大練りが終わると各祷務町の精進人がヤーヤを従えて毎夜尾鷲神社を参拝します。その際、身を清めるために垢離掻きが行われます。尾鷲港魚市場に設けられた脱衣所で素っ裸になり、真冬の海へ飛び込み体を清めます。その後提灯を受け取り、お祈りをして戻ります。若い女性は勇ましい男性を見ようと前を争って港魚市場に詰めかけるほどです。

最後の5日は正午から一番祷を先頭に二番祷、三番祷の順に旧熊野街道の林町、南町、土井町、中井町、北浦町を経て、尾鷲神社へ宮上りします。3つの祷が神社へ全部集合するのはあたりも薄暗くなった夕方になります。境内にかがり火が赤々とたかれ、汐撫が潮水で射場を清め、約14メートルの距離から三祷の各弓射が二本ずつ射る「弓射の奉納」が行われます。弓射が済むと次は「お獅子の出迎」。獅子頭を宮司が頭上にいただいて、徐に一の鳥居まで歩いていき、獅子殿に帰るとき、右回りで帰れば豊作、左回りの時は浜方が豊漁だと言われています。豊凶を占う神事のため、若者たちは獅子頭を自分たちの方へ向けようと凄まじい勢いで練り合います。

5日間に渡って行われる「ヤーヤ祭り」。以前は部外者が参加できない祭りでした。しかし、近年尾鷲地区の著しい人口減少、及び高齢化による参加人数の激減で、祭りの継続・活性化のために尾鷲在住者以外も参加できるようになりました。

文：ＯＤＡ広報委員会　イラスト：大和田　昌